

# 秋田高専における教養教育と英語教育に関する一考察

小 林 貢

## Liberal Arts and English Education of Akita National College of Technology

Mitsugu KOBAYASHI

(2003年11月28受理)

It is regarded that liberal arts and communicative English ability are the inevitable factors for the cosmopolitan. In addition to that, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology recommends students to acquire wider knowledge and to have the practical and communicative English ability, which JABEE also proposes necessary qualifications for international engineers.

The purpose of this paper is to show an approach to comprehend global cultures under the way of thinking of holistic education and to improve the English ability as about mentioned by using classics, discussion, debate, presentation, DVD, CALL, TOEIC, The Step Test and liberal arts.

The English department of Akita National College of Technology has been trying many practices to improve students' English abilities and to make them understand world-wide cultural differences. If we can explain our culture and understand other ones in English, it will be easier to work and to have good relationship with the people of the world. This is one kind of international perspective, which helps us to make international engineers.

### 1. はじめに

1991年における「大学設置基準の大綱化」により、日本においては各大学の自由なカリキュラムの裁量が認められることとなり、それにより、情報関連の授業、資格関連の授業、実用語学関連の授業などの実用教育の授業の増加の傾向が見受けられる。

その流れは英語教育にも影響を及ぼしており、それは2006年度の大学入試センター試験において外国語の英語でリスニング（聞き取り）テストが導入される方針であることや文部科学省においても2001年1月「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」において「言わば国際共通語となっている英語によるコミュニケーション能力の向上が強くもとめられている」ことを受けて、『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』（2003年）が立案され、小学校からの実践的英語コミュニケーション能力の育成が検討されている。このような状況において本校英語科においても英検、TOEICを活用した「秋田高専英語教育改善プロジェクト」を実施している。

先に述べた文部科学省における『英語が使える日本人』育成の具体的な目標は国民全体に対しては「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションできる」であり、専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められている英語力は「大学を卒業したら仕事で英語が使える」である。つまり、最終的には世界平均水準の英語力を目指すことが目標となっている。

そのみならず、国際的に通用する技術者養成のために、大学・高専における技術者教育プログラムを審査する JABEE：日本技術者教育認定機構（Japan Accreditation Board for Engineering Education/設立1999年11月19日）に対して、平成18年度の認定を目指すことを目標に取り組みを進めている本校は、教養教育重視を前面に打ち出すことを進めている。これはアメリカの教養教育において人文科学・社会科学・自然科学の均等履修モデル（ハーバード・モデル）が1970年代後半に文学、芸術、科学、歴史、社会研究、外国文化理解、道徳的推論を含めたコア・カリキュラムとなり、他大学

もそれに追従したことと軌を一にしていると考えられる。

特に、道徳的推論、言い換えるならば人間性は学問性と同等に重要であり、ホリスティック教育が必要とされていることを示していると考えられる。

holistic:「全体論的」とは「複雑な体系の全体は、単に各部分の機能の総和ではなく各部分を決定する統一体であるとする」考え方であり、教養教育とはヨーロッパの中世大学において7自由科(文法、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽)を学んでから哲学を学ぶことで、心身ともにバランスのとれた、理知的で美的センスのある人間を育てることであったのである。

これらのことを踏まえて、この論文においては、これから秋田高専において求められている教養教育と英語教育とはどのようなものであるのかを考察する。

## 2. 中期計画における教養教育と英語教育

### 2.1 「教養教育と英語教育に関する計画」

まず第一に、本校における中期計画における教養教育と英語教育に関する事項を確認することから考察を始める。以下は関連部分の抜粋である。

「秋田工業高等専門学校の中期計画についての記載事項(中間報告)」における(前文)○養成すべき人材像の2.においては「人間社会の国際化に対応するために、異文化理解や外国人とのコミュニケーション能力を身につけた、英語をはじめとする外国語に堪能な技術者。」(p.1)と述べられている。

また「国立高等専門学校の教育研究等の質の向上に関する目標(I) 1 教育に関する目標 (1) 教育の成果に関する目標 においては ①教養教育 ア)「自らの意見を的確に表現し行動できる能力、知識を整理し構造化できる能力等、人間としての素養を、年令の発達段階に応じて修得することを目指す。」ウ)「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力、互いの意思の疎通ができる実践的な英語能力の修得を目指す。」(p.1)と述べられている。

次にI 国立高等専門学校の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 1 教育に関する目標を達成するための措置 (1) 教育の成果に関して達成すべき内容・水準(徳育、創造性教育を含む) ①教養教育 ○実践的技術者として備えるべき人文・社会系、体育ならびに理数系を含む教養教育や外国語能力の内容・水準(人文・杜

会系) ア)身につけた知識や経験に基づき、自ら問題を発見し、解決への計画と立案、資料の収集と分析及びそれらのまとめをできる能力や、自らの意見を日本語での確に表現できる能力。イ)人の行動・感性・知性・文化等を理解し、多様な視点から社会事象を考察することができる能力。オ)音楽や美術等の芸術作品の価値や意義を理解できる能力(外国語能力) 互いの意思疎通ができる実践的な英語能力及び独語など第二外国語の基礎知識。(p.5)とある。

また(2)目標に掲げる内容・水準を達成するための教育指理等 ②教育課程、教育方法、成績評価等 ○教養教育、専門教育、専攻科教育ごとに、(1)に掲げた内容・水準を達成するための効果的な教育課程の既成方針の設定をはじめ、授業形態、学習指導方法等の改善の具体的方策 教養教育 ウ)既存の文科・科学ゼミナールは教員1名の担当学生数が20名と多く、また人文・社会系と理数系の分離という問題を有するため、文科・科学ゼミナールを融合し、人文科学と自然科学を担当する全教員は、3学年を対象に、興味あるテーマについて週1回(1時間程度)研究指導を行う。なお、教員1名の担当学生数が10名程度になるように、カリキュラム上で工夫する。(p.6)とある。

(人文・社会系) エ)現在1学年に1単位設けている芸術の授業では、芸術に接する機会が少なすぎるため、2学年に1単位設け、芸術の総時間数を増やす。(p.6)とある。

(外国語) ア)平成13年度から長期的展望に基づき行っている「秋田高専英語教育改善プロジェクト」の結果とJABEEへの対応を考慮して、平成17年度までに、英語の科目に英語のみを使う授業を導入する。さらに、TOEICを活用してリスニングなど英語力の向上を目指す。イ)3学年に、英語力向上のための合宿を計画する。とある。(p.7)

更に、専攻科教育 イ)少人数教育の利点を生かし対話型授業を行うことにより、疑問点に関してはその場で解決し、ディベートする能力の向上を図る。(p.7)とある。

(3)目標に掲げる内容・水準を達成するための実施体制等 ②教育環境の整備 ○教材、学習指導方法等に関する研究開発の具体的方策 英語科目において、IT機器を活用した教材を開発する。(p.8)とある。

加えて、3 研究に関する目標を達成するための措置 (1)取り組むべき研究の在り方や領域 ○研究の教育への還元に関する具体的方策 イ)平成

14年度から実施している「創造性教育方法に関する研究」テーマを従来どおり募集・採択するとともに、予算を重点的に配分し、研究成果は実験や特別研究内容に取り入れる。(p.10)とある。

4 その他の目標を達成するための措置（社会との連携、高専間または高専・大学間交流、国際交流等に関すること）○留学生交流、その他の国際交流に関する具体的方策 ア)外国大学と提携し、専攻科生の海外派遣の実現に向け取り組む。イ)専攻科生の海外での語学・企業研修の実現に向け取り組む。エ)外国大学と提携し、毎年1人～2人程度の教員を海外研修に派遣出来るように準備をすすめる。(p.11)と述べられている。

## 2.2 「教養教育と英語教育に関する計画の検討及び授業実践」

2.1 で概観した事項に対して実践されている授業やプロジェクト及び今後の対策について以下で考察する。

### 2.2.1 「自己表現教育」

「自らの意見を的確に表現し」、「互いの意思の疎通ができる実践的な英語能力の修得を目指す」ためには「自らの意見を日本語で的確に表現できる能力」すなわち「7自由科」における修辞学のようにプレゼンテーション能力が必要である。このことに着目し、平成14年度の文科ゼミナール「プレゼンテーション演習」においては以下の内容で学生の募集を行った。「人間は社会生活を営む上で他者と関わる意思決定においてプレゼンテーションが重要な役割を果たす。このゼミナールにおいては今後、企業等の集団において必要とされるプレゼンテーションの演習を各個人が選択する事象を用いて日本語（各個人が選択する場合は英語）で行う。」

この表現能力の演習ゼミナールには10名の学生が参加した。以下は学生自身で選んだ演習のテーマである。「車（エンジン、ターボ）、モータースポーツ、ウルトラ・ライト・プレーン、タイ国の国会議員の休暇、DVD、伊勢神宮参拝、数学、パソコン、ガソリン、車を長く乗る方法、飛行機、イラク攻撃、パソコンOS、カップヌードル、服装、新学習指導要領、陸上競技（スプリンター）、読書、有事法制、いたずら書き、原子力発電、睡眠、アルバイト、死刑制度、映画、テレビ番組」

これらのテーマについて学生がプレゼンテーションを行った後で、ディスカッションを行った。以下は「テレビ番組」に対するA学生のプレゼンテーションの概略と、それに関して他の学生（Bから

F）が意見を述べているディスカッションの様子である。

A「先日、新聞を見ていたら、あるバラエティ番組でのゲームにおいて、負けた者への暴力や笑いが子供に対して悪影響を与えるという理由で番組が中止になったという記事が載っていた。しかし、私はこの処置は短絡的であると思う。子供は何よりも親から一番影響を受けるのであって、親こそは、何が正しいか間違っているかを教えるべきであって、テレビ番組に責任転嫁するべきではない」

B「中学校において同じような罰ゲームがなされていたことがある。テレビ番組にも問題がある。倫理が必要だ」

C「子供は模倣によって学習するので、悪い例は悪い影響を与える。特にテレビ番組の影響は大きい」

D「テレビ番組やゲームは仮想と現実との区別のつく年齢の人間にはまったく影響しないと思う」

E「テレビ番組は小さな子供には理解できないと思うので特に配慮が必要だ。」

F「親にしるテレビ番組にしる学校にしる社会全体で子供を支えているべきだ」

（平成14年9月2日の授業において）

一人の学生が、高校生を主人公としたアクション・ムービーの内容について英語で説明してくれたことがあった。もちろん、それに対しては英語で質疑応答を行った。このような自己表現の訓練は国際化の時代では特に必要である。なぜならば、自分のことを表現できない人間に対する欧米人の評価は低いのみならず、インタラクティブな言語コミュニケーションによる上手な自己表現は、訓練しない限り日本語においてさえも難しいからである。

また専攻科教育におけるディベートする能力の向上を図るためにも、英語は言うに及ばず、日本語を話すときにおいても論理的に話す訓練が必要であると考えられる。なぜならばディベートとはクロス・イグザミネーションを含めたアファーマティブとネガティブとの間の一つのテーマに関するレフリー付きの創造的な討論（闘論）であるからである。

これらのoralな自己表現教育に加えて、英語のwriting能力向上のために、本校は『朝日ニッケ英文エッセーコンテスト』に参加している。昨年度（第16回）においては、筆者の担当したクラスの2名の学生がチャレンジ賞を授賞している。

これからも自己表現能力の向上のための試みを行っていきたいと考えている。

### 2.2.2 「芸術理解教育」

2学年に1単位を設け、芸術の総時間数を増やす



ことはホリスティック教育にも適合しており、教養教育が、ローマのフマニタス概念やギリシャのパイデア概念に源がある「人間形成理念」であることを考えるならば、適切な措置であると考えられる。音楽や美術等の芸術作品の価値や意義を理解できる能力を養う「芸術理解教育」は意義があるのみならず、芸術が「美術館」「コンサート」「庭園」「景観」「演劇」などの形で生活に根ざしている欧米の生活や文化を理解することで、欧米人やその他の地域の外国人と英語やその他の言語を使って交流するためには最低限必要であると考えられる。

### 2.2.3 「共生のための異文化理解教育」

「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力」を養い、「人の行動・感性・知性・文化等を理解し、多様な視点から社会事象を考察することができる」ためには異文化に対する知識が必要である。そのことを考慮して平成15年度の文科ゼミナール「シェイクスピアって誰？」においてはCHARLES & MARY LAMBの *Tales from Shakespeare* における *Hamlet, Prince of Denmark* と *The Tempest* を購読することでシェイクスピアの劇に内在する多様な問題を取り上げ、その内容について考察したのである。普段の授業では読めない一つのテーマに関する長い文章を2年生において読む経験は、学生の今後の英語学習の上で大きな意味を持ってくると考えられるのである。

それに加えて在外研究員でのイギリス留学経験を基にした、イギリスの歴史、地理、文化等について説明することにより、イギリスという国固有の視点の理解を試みている。例えば、*Hamlet* を読むことにより、学生に対して王制や貴族制が残っている階級社会イギリスと日本との根本的な文化の相違の理解を試みているのである。このような歴史を含めた異文化理解のアプローチは、学生の異文化への抵抗感を減らし、理解できる能力の育むためには有効であると考えられる。このようなアプローチは平成15年度の専攻科の英語Ⅱの授業においても考慮されており、異文化理解教育を一つの目的とした題材である *The Universe of English II* (東京大学教養学部英語部会編) を取り上げることにより、神話、格言や箴言を含めた欧米的な視点に基づく英文を購読することで、異文化との共生能力の育成を目指している。

### 2.2.4 「資格試験による実用英語教育」

「TOEICを活用してリスニングなど英語力の向上を目指す」ために平成14年度の専攻科の英語Ⅰ及び英語Ⅱの授業においては *Enjoy Learning the TOEIC Test* (石井隆之, 中川 昭, T. Koch 著,

三修社) を使用してTOEICの演習を行った。平成15年2月15日のTOEIC Institutional Program (IP Test) において受験を希望した専攻科の学生は1, 2年を合わせて9名であった。(A~Dは2年生, EからIは1年生)

	Listening	Reading	Total
A	290	185	475
B	400	300	700
C	235	205	440
D	220	150	370
E	380	350	730
F	380	205	585
G	235	155	390
H	245	175	420
I	215	155	370

以下はその得点分布である。

表が示しているように Total の最高点は730点、Listening Part の最高点は380点、Reading Part の最高点は350点であった。Total の平均点は497.7点、Listening Part の平均点は288.8点、Reading Part の平均点は208.8点であった。

同時に受験した3年生の Total の平均点は332.6点であり、全国の高専3年生の平均点である306点を26.6点上回った。

また大学生の全体平均スコア414点を上回った26名の学生が校長先生から表彰された。

TOEICのみならず、本校は平成11年度から平成14年度まで4年連続して実用英語技能検定奨励賞を受賞している。平成14年度の3級合格者は106名、準2級合格者は103名、2級合格者は3名である。

この4年間で特に変化が著しいのは準2級合格率である。平成13年より始めた「秋田高専英語教育改善プロジェクト」による英検クラス専用教材「英検準2級合格セミナー(改訂版)」(旺文社)の演習を2年生のカリキュラムに導入したところ、合格者数が平成12年度の31名から平成13年度には124名となった。言い換えるならば合格者数は1年間の演習により4倍に増加したのである。

以上の結果から TOEIC, 実用英語技能検定などの資格試験の演習を授業において実践することは、秋田高専の学生の英語に対するモチベーション

を高めるには有効なアプローチであると考えられる。今後も TOEIC, 実用英語技能検定などの資格試験を用いたアプローチにより, 実践的な英語教育を推進する必要があると考えられる。

### 2.2.5 「IT 機器活用による, 留学を視野に入れた実践的英語コミュニケーション能力育成教育」

留学生と交流したり, 専攻科生の海外派遣や海外での語学・企業研修の実現に向け取り組むためには実践的英語コミュニケーション能力の育成が不可欠である。平成12年度の文科ゼミナールにおいては, LL 教室においてビデオ教材を使って英語の情報収集能力の向上を目指す「Listening for Information」を実施した。また平成15年度における「創造性教育方法に関する研究」テーマで採択された DVD (Digital Versatile Disk) を用いた創造教育プロジェクト「Brush up Our English with Caption」も, リスニング能力の課題を解決するための一つの試みである。以下は学生に対して実際に行ったプロジェクトのお知らせである。

#### 平成15年度創造教育プロジェクト

「Brush up Our English with Caption」のご案内  
学生の皆さん, こんにちは。皆さんは欧米の映画を鑑賞した時に, 日本語字幕なしに, 英語で映画を理解したいと思ったことはありませんか。そう思ったことがある貴方に, 平成15年度創造教育プロジェクト「Brush up Our English with Caption」への参加をお勧め致します。

映画の英語を日本語字幕なくして理解する訓練の有効な方法の一つとして Caption (キャプション「英語字幕」) を使った英語学習方法があります。最近, DVD のハード機器の発達により, ソフトに内蔵されている Caption を画面に表示することができるようになりました。Caption を使用することにより, 映画を日本語の媒介なしで, 統語的にも英語のまま理解できる訓練を行います。そして最終的には, Caption なしで映画を理解できることを目指します。

このように, 魅力ある映像を英語で鑑賞することは, TOEIC の LISTENING COMPREHENSION の対策も兼ねています。このプロジェクトに参加を希望する学生を募集しています。参加申し込みは事前に人文科学系(英語)小林研究室にお願い致します。以下は実施計画です。

- 第 1 回 平成15年10月29日 (水)
- 第 2 回 平成15年11月 5 日 (水)
- 第 3 回 平成15年11月12日 (水)

- 第 4 回 平成15年11月19日 (水)
- 第 5 回 平成15年12月10日 (水)
- 第 6 回 平成15年12月17日 (水)
- 第 7 回 平成16年 1 月21日 (水)
- 第 8 回 平成16年 1 月28日 (水)
- 第 9 回 平成16年 2 月 4 日 (水)
- 第10回 平成16年 2 月18日 (水)
- 実施時間 午後 3 時45分～
- 実施場所 LL 教室

人文科学系 小林 貢

この DVD の Caption を用いた英語学習によって学習者は日本人には難しい「音の脱落」「音の連結」を確認することができるのと同時に, Caption を追うことにより, 速読の練習にもなるのである。この学習効果はアメリカのテンプル大学や日本においては青山学院大学等の大学における研究において確認されているのである。

このプロジェクトにおいてはその題材の選択にも「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力」を養い, 且つ学生の意欲を促進するように留意した。具体的にはシェイクスピアの名作であり, トレバナー・ナンが監督をしている「十二夜」やケネス・ブラナー監督, 主演の「恋の骨折り損」及びコックニーを取り扱った, バーナード・ショーの「ピグマリオン」を映像化したオードリー・ベプバーン主演「マイ・フェア・レディ」を取り上げることにより, 可能な限りイギリス文化の確認とイギリス英語の特徴の理解を試みた。またアメリカ英語においても「グリーン・マイル」を取り上げることにより, アメリカ文化の確認とアメリカ英語の特徴の理解を試みた。実際には, 7 回の実施で延べ67名の学生がこのプロジェクトに参加した。1 回平均 9.57名の学生が参加したこととなる。また, 参加した学生は1年生から専攻科2年生までに及んでいた。彼らは自発的且つ意欲的に英語理解に取り組んでおり, プロジェクトを実施した意義は参加した学生には認められたと考えられる。なお, このプロジェクトにおける試みは平成16年度文科ゼミナール「Brush up Our English with Caption」として継続して実践される。

このように, 多量の英語を浴びるように聴いたり, 読んだりすることにより, インプットのみならず, アウトプットにも好影響が及ぶことは, 経験的に明らかであるとともに, 第二言語習得理論の第1人者であるアメリカのクラッシュン博士の入力仮説 (Input Hypothesis) によって理論化されているの

である。このプロジェクトを押し進めることにより、TOEICのIP Testに好影響を与え、留学を視野に入れた実践的英語コミュニケーション能力の育成を試みている。

IT機器活用による、留学を視野に入れた実践的英語コミュニケーション能力育成教育のためのもう一つの可能性は予算的に可能であるならば、LL教室を更新して、CALLシステムを導入することである。

CALLシステムが設定され、活用出来る場合には指導者中心型の授業から学習者中心の授業へと学習スタイルが一変する。それによって学生は習熟度別にAutonomous Learningをすることができるのである。またホームページやE-mailは通例、英語が共通語であるので、英語によって世界の人達と交流することとなり、それが英語を勉強するモチベーションになりえるのである。

E-mailを使用することで海外の学校と英語を用いて通信を行った授業実践の事例としては平成10年度と平成11年度の文科ゼミナールの授業「E-mailで通信しよう」があげられる。平成10年度はアメリカのウエストヴァージニア州のWeirtonにあるWeir High SchoolにおけるJapanese 1の授業を受けている学生達と、平成11年度はアメリカのコロラド州のBoulderにあるCentennial Middle SchoolにおけるWorld Classの授業を受けている学生達と「アメリカ文化理解と日本語・日本文化紹介」をテーマとしての文化交流を英語で行ったのである。

また、留学自体を実現するための可能な手段の一つとしては、NCN 米国大学機構 (NATIONAL COLLEGIATE NETWORK) による米国大学日本人学生受入制度が考えられる。

### 2.2.6 3年生合宿研修における英語合宿の可能性

平成15年現在、3年生は9月に4学科合同で田沢湖スポーツセンターを拠点としてa)合宿生活を通じて、学生相互・教官と学生の交流を深め、望ましい人間関係の樹立を図る。b)集団生活の規律を体得させ、実践を通して協働の精神を養う。c)「地域・文化」と「自然・環境」について考えることを実施目的として合宿研修を実施している。今年度は、わらび座で「春秋山伏記」を観劇し、自然観察指導員の山岡 一氏による御講演「十和田八幡平国立公園の自然について」を拝聴し、澄川地熱発電所や(株)エコリサイクルの見学を行った。

「3学年に、英語力向上のための合宿を計画する。」とあるので、当初、栃木県那須郡那須町において、

多数の英語関連の著書を執筆している千田潤一氏、鹿野晴夫氏が主宰しているアイ・シー・シーにおける英語の自己学習法の修得とTOEICの点数アップを目的とする、1泊2日の合宿を検討していた。

しかしながら、現在の合宿研修の予算は1年時と3年時を合わせて1万円であり、予算的・日程的に、実現が難しい状況である。

加えて平成15年度3年生合宿研修の反省会において、自然保護や芸術鑑賞の体験と学校の特色に沿っている職業意識を高める企業見学の重要性が確認されたのである。

以上の観点から、学科による分離行動やスケジュールの調整を含めた、3年生合宿研修の意義に更に付加価値を加えられるような計画の再検討が必要であると考えられる。

### 2.2.7 英語のみを使用する授業の可能性

「平成17年度までに、英語の科目に英語のみを使う授業を導入する。」とあるのでこれに関して述べる。今までも英語のみを使った授業を試験的に何度か展開したことがあるが、このようなアプローチは平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」における北星学園大学短期大学部英文学科の「一般教育と統合した英語カリキュラム展開」の例が参考になると考えられる。

このような授業における問題点は、工業を専門とする本校の学生のリスニング能力が、そのような授業に十分に対応できるかどうかである。授業におけるリスニング演習や創造教育プロジェクトでの演習を通して、学生のリスニング能力の更なる向上を目指したい。それによって、英語のみを使った授業を導入する際に、学生が十分に適応できる状態を事前に確立することが必要であると考えられる。

## 3. まとめ

教養教育が、「人間形成理念」の方法論であることをことを考えるならば、学問性と同等に道德教育を含めたホリスティック教育が必要とされていることは明らかであると考えられる。

それと同じ方向の延長上に存在する英語教育においては、グローバル時代の世界の国際化に対応できる「実践的英語コミュニケーション能力」の育成が必要とされている。言い換えるならば、「多国籍や他分野の技術者からなるチームの中で協働して活躍できる」国際的な技術者を育成するためには、日本的な枠組みを説明し、相手に理解させることができる能力の育成と共に、様々な価値に理解を示すこと

により、「グローバル時代の世界の価値と共生できる能力」を育むことが必要なのである。そのためには、日本人としてのアイデンティティを大切にすることのみならず、世界の異文化を理解し、共生するために必要とされている教養教育と英語教育を、既成のパラダイムに囚われることなしに柔軟に推進していくことが求められていると考えられるのである。

## 参考文献

小林 貢 「国立高専秋田における英語教育の現状と課題」—低学年における英語教育に焦点を当てて—  
論文集 高専教育, 第24号, pp.187-192. (2002.3)  
小林 貢 他「Students-Centeredness と CAI」  
平成14年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp. 633-636. (2002.10)  
小林 貢 他「Autonomous Learning (自律的学習) と CALL」—英語を母国語とする外国人学生との E-mail による英作文学習の可能性—情報処理教育研究発表会論文集, 第22号, pp.119-122. (2002.8)  
今井重孝「社会学的大学論の検討—シェルスキー, ルーマン, リースマンを手がかりとして」大学論集,

第28集, pp.23-38. (1998)  
東京大学 大学総合教育研究センター「アメリカ大学の学士課程教育」(1997)  
北岡俊明「ディベートの技術」PHP 研究所 (1996)  
菱田一三「脚光あびる CC 学習」CC-Study Vol.2, 学習研究社, pp.4-6. (1993)  
「秋田工業高等専門学校の中期計画についての記載事項 (中間報告)」pp.1-14. (2003)  
今井重孝 <http://www.cc.aoyama.ac.jp/ser/t11355>  
英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/13/01/010110a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/01/010110a.htm)  
「英語が使える日本人」の育成のための行動計画  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/03/03033101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033101.htm)  
平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択取組の概要および採択理由  
<http://www.juaa.or.jp/news/pdf/program/examination-reslut/h15theme1.pdf>  
NCN 米国大学機構 (NATIONAL COLLEGIATE NETWORK) <http://www.ncn.ac>